

## 令和6年度 第1回 学校運営協議会議事録

- 1 期 日 令和6年7月10日(水)
- 2 場 所 鹿児島商業高等学校 会議室
- 3 出席者 学校運営協議会委員(9名)  
学校関係者(9名)

### 4 会順及び協議題

- (1) 委嘱状交付
- (2) 学校長あいさつ
- (3) 学校運営協議会についての説明
- (4) 自己紹介
- (5) 学校経営等について
- (6) 学校の概況説明
  - ア 教務部
  - イ 生徒指導部
  - ウ 進路指導部
  - エ 保健部
  - オ 商業科
  - カ 体育科
- (7) 質疑応答、提言等
- (8) その他

### 5 協議の内容や意見等

○学校経営方針に「よく考え判断し行動する生徒」と掲げられている。この「考える」ということがすごく大事だと思う。また、DXの充実には驚いている。ぜひAI部にも協力したい。

○校則の見直しは毎年行うのか。

→ 指導ではなく、時代に即した支援という形が望ましいと考えている。今後も校則の在り方見直しを考えながら、生徒の自主的な活動へと変化していきたい。

○共学化され女子生徒が入学し、現在2・3年生の生徒はどんな様子で過ごしているか。

→ 以前なら少し荒い言葉遣いがあったが、そういったものがなくなったように感じる。むしろ女子のほうが気兼ねなく生活を送っているのではないかと感じる。

○取組を見ていると、先生方の努力はすごいなと感心しつつ、負担も大きいだらうと思う。

○会議室の場所がわからず、通りがかった女子生徒たちに尋ねると、こちらまで案内してくれた。いい教育が行き届いていると感じた。

○1日体験入学とオープンキャンパスの違いは何か。

→ 1日体験入学の対象者は、原則中学3年生と保護者。学校説明と体験授業(こちらが用意する講座をすべて受ける)と部活動体験。オープンキャンパスの対象者は、中学校1～3年生と保護者。施設見学・制服の試着等・体験授業(1講座のみ)・部活動体験を希望する内容や時間を自由に選択できる。

○簿記検定の受験について、なぜ日商でなく全商を受験させているのか。

→ まず全商で基礎的なことを学ばせた上で、日商にもチャレンジできる生徒は挑戦しようというスタンスでいる。全商は学習指導要領に基づいた範囲であるのに対して、日商はそれを超えている。高い目標をもってチャレンジしたい生徒には、補習等で指導をする体制はある。また、日商は受験料も高額で受験を勧められない面もある。

○ビジネスクリエイト科の学びはとても面白そうで、当時の自分が受けられたなら、きっとこんなに苦しまなくてよかつただろうと感じた。そういった意味で、今の高校生は恵まれていると思う。

○高校が地域との連携を通して、企業や経営について学ぶことに力を入れようとしているということは、逆に企業や経営者が抱えている悩みについても高校生や若い人たちの意見を聞くことができるということでもあり、それはとてもありがたい。

○この多様化の時代に対応するには、先生方も苦労が多いと思うが、県内外で活躍できる人材育成に取り組みされていることは素晴らしい。

○課題研究の授業は、最終的にどういった形になるのか。校外に発信したりする機会はあるのか。

→ 課題研究のテーマは、教員が大枠を決めて、その中で生徒が選択するようにしている。その後各自のテーマや活動は、生徒たちが決めていく。そこで、企業と連携をするのであれば、生徒たち自身で行動するところから始まる。発信の方法として、商品開発の例を挙げると、商品自体が完成して、どこでどのようにコマーシャルをして、販売するかということまで生徒が考えて実践する。また、eスポーツは、ゲームをするだけでなく、その戦略を考えて、全国規模の大会にも出場する計画である。なお、全体的な活動報告として、3学期に校内で課題研究発表会を行っているが、企業を交えての活動報告や、コンテストに出場するという事も今後は考えられる。

○進路はどのように決めていくのか。インターンシップもそれに影響を与えているのか。

→ 就職希望者が企業を決めるにあたっては、1年次より外部のプログラムを用いて、企業研究や企業見学をしている。それを踏まえて、就職実績がある企業を中心に、進路指導部から紹介された企業を選ぶことが多いが、新規で受験先を探す生徒もおり、いずれも最終的には三者面談で決定する。インターンシップは、コロナの影響もあって3年ほど実施できていない。

○キャリアパスポートとはどういったものなのか。

→ 目標の設定、テストの振り返り、取得した資格の記録などを学期に数回記入する機会を設けている。また、講演会の感想等も綴って整理させることで、履歴書や志望理由書等に活用しており、中学校時から引き継いでいるものである。

○資料を見ると、これまで以上に商業教育に対して具体的に取り組んでいると感じた。DXについては、小さい企業でも取り組まなければならない時代なので、今後一層力を注いでほしい。

○生徒総会は今もあるのか。

→ ある。そこで話題になった生徒からの要望を職員で検討して、生徒に回答する流れになっている。

○県外に人材を流出させがちな本県にあって、鹿商は県内の就職者が多い。鹿児島で商売を営む身としては、これからも鹿児島に残ってもらいたいのだが、コロナ前後で何か変化はあったか。

→ 就職に関しては県内と県外がだいたい半分ずつといった割合で推移している。ここ数年はやはりコロナ禍にあって、県内就職がやや増えている。他校に比べ県内就職者の割合が多い理由を挙げるならば、県外企業と県内企業の待遇(給与面)に差がなくなってきたため、県内に残りたいと思う生徒が増えているのではないかと。

○共学になったことで、特に何か問題がないか。

→ どこからが問題なのかという線引きはさまざまだと思うが、上級生が様子を見に休み時間に1年生の教室のあるフロアまで行く程度のことはある。

○鹿商ではどのような金融教育をしているか。

→ 3年生の2月に「消費者金融講座」と題して、外部講師を招いている。また、2年生でも講師を招き、「ライフデザイン」という内容で、金融教育も含めた高校卒業後の人生設計について学ぶ機会を作っている。商業科では1年生の「ビジネス基礎」という科目で、外部講師を招き、金融経済について学ぶ機会を設けている。投資や貯蓄というところにも踏み込んだ内容になると、その後の学びの質が上がることを期待できる。

○学科再編・男女共学という変革の中で、「どういった取組で、どんな学校を作っていくんだ。」という校長先生はじめ、諸先生方の熱い思いを感じワクワクした。

○コロナ禍で、「会話をするな。交わるな。密になるな。」と言われた子どもたちが社会に出て、1・2年経った。我々経営者から見ると、最近の子は、「間の取り方が悪い。」「自己主張や表現力に乏しい。」「自己肯定感が低い。」と感じられ、この感染症が与えた影響は大きいと思っている。今年度はおそらくこれまでとは質が違う生徒が入ってきただろうから、ICTを活用しつつも生徒に寄り添い、対話を重視した指導を大切にしてほしい。そういった意味で、1年生で二人担任制を採用したことは意義があると思う。

○130周年の歴史を守り、それを活用する上で、OBとの関わりを大切に、他の学校にはできない体験や学びを取り入れてほしい。

○経済界で本当に活躍しようと思うと、簿記の資格はすごく大事だと思った記憶がある。「履歴書に書けるから。」ではなく、「何のために資格を取るのか？社会人になったときに、必要になるのではないか？」という視点に立って挑戦できれば、それだけでも将来の強みになると思う。

○昨今学校が抱える課題はさまざまあるが、先生方だけでなく生徒と共有しながら、ディスカッションしていくことが望ましいのではないだろうか。生徒に当事者意識を持たせることで、より魅力的な学校を作ることができるのではないか。

○不登校生徒が全国で30万人を超えたというニュースを聞く。鹿商ではどれぐらいの不登校生がいるのか。

→ 欠席日数が年間30日を超える生徒は、各学年に数名程度いる。

○一日体験入学の申込者が激増している原因についてどのように考えているか。

→ 1年生に行ったアンケートによると、鹿商を選んだ要因として「魅力ある学習活動」を、62%の生徒が選んでいる。他県では3単位程度の「課題研究(探求学習)」が、8単位もあるのはおそらく全国初だと思う。ちなみに、「共学だから。」という意見は30%しかなかった。中学生にとって共学は当たり前のことで、高校教育を経て、その先に自分の進路が少しずつ見えてくる。そういったことがしっかり学べる場所だという理由で選ばれているのだろう。

○県知事選挙の期日前投票所を校内に設けたところ、生徒・教職員の30名ほどが投票されたと聞いた。昔はあまり政治の話をすると言われてきたが、我々が生活する上で、投票することは未来について考える大切な権利だ。政治や選挙に対して、どういった指導を行っているか。

→ コロナ禍にあっては、実際に投票をするという形での主権者教育がなかなかできなかった。今回は、市から依頼があり、学校に投票所を設けることができた。また、「公共」の科目の中でも選挙について学んでいる。

○二人担任制について、一人担任制との違いを含めて教えてほしい。

→ 二人担任制は1年生のみ実施しており、生徒たちは中学時代から友人関係が変化し、通学や部活動、学習面においても環境が大きく変わるため、その不安を和らげるために導入した。

例年1年生は保健室の利用が多いと感じている。また、欠席・遅刻が増えて、進路変更したり退学をしたりする生徒は1年生に多いため、子どもたちが相談しやすい環境を作り、手厚くフォローすることを目的としている。

○教育の基本は家庭にあると思っているので、子どもたち同士のトラブルにも保護者はアンテナを高くしておく必要があると感じた。